

## 題三想隨



スペインの女（カット/山平義正）

## 私のヨーロッパ旅行

山平 義正

（美人画家）



今春地中海に面した国々の風物、殊に女性を描くための写生旅行に出た。当日の搭乗機は就航初日とあってアメリカの団体旅行者も混じりかなり賑やかな旅となった。大柄な機長のユーモラスなサーヴィスぶりは国内路線しか乗らない私には心よい思いがした。出だしをまずロンドンの大英博

物館とナショナルギャラリーを観る事にしてホテルからオックスフォードサーカスの雑踏を縫いながら大英博物館を訪ねた。入口で簡単な荷物の検査があったが入場無料はさすがと感心した。実に広大な館内にあれだけのものを収集されたものだと驚く。エジプト、アジア、東洋と観て廻る内に私が美人画を選んだ事をつくづく幸せに思った。いくら達者でうまく描いてもヨーロッパ絵画は日本人には表現出来そうでない事を実感した。思い余って係員に写真を撮ってもよいかと尋ねて貰ったら、OKとの事であった。パリの美術館でもそうであったが、ヨーロッパの美術館では写真をとる事は禁じられていない。来年四月日本に来るといいうルブル美術館のモナリザ

の前だけはフラッシュをたいてはいけないが、写す事は一向さしつかえないとの事だ。日本でスケッチをして叱かれた思いがある私にはこれが本当の文化を理解する国と、ほど遠い国の違いかと今さらながらその受けとめ方を考えさせられた。

パリで一週間を美術館廻りに費し、フランス料理を食べ歩いたが、何分パン食、ベッドに弱い私は、ついに和食の恋しさにたまたらずオペラ座近くの日本店に飛び込んだ。かすり姿の日本女性の出迎えてほっとした。日本酒、きつねうどんがなんと五四〇円。酒は瓶香がついて日頃灘酒を呑んでいる私には戴きかねた。リドで隣に居合せたアメリカ婦人はパリの物の高いのにブンブンおこっていた。

旅に出てその地の風土風物と人の出逢いは大きな思い出となるものだが、モナコに向うべくオルリ空港での待時間に建築家の丹下健三ご夫妻に逢って、一時間余り話に華が咲いた。先生はローマ、私はニスにと向ったが、今や日本の建築家は世界中の仕事に追いまわされておられる様だ。モナコ着の四月八日はピカソが死亡した。新聞は一面トップ記事で報道し街はピカソの話題でもちきりだった。アンチープのピカソ美術館を翌日訪ねたが静かであった。五日

間を南仏で過しマドリッドに飛んだ。耕地は整然とし道路は広く大都会の建設は進み大きく発展しつつあった。いくたびかの他民族支配による混血と相まった情熱的な美しさと人情はユニークな魅力として訪れる人々に想い出深いものを与えてくれる。陽気で明るいスペイン人の商売上手は驚かされた。これはオランダ、イタリヤ人と違った味があった。唯料理はあのオリーブ油を使ったスペイン料理にうんざりさせられ、オニオンスープには顎のたるさに泣かされた。フラメンコを踊る女の魅力は

## 神戸古物風景

山崎 朔三

（二紀会同人）



今もお心に強く、忘れ得ぬ踊りであった。草鞋を楽しみながらアンダルシア地方へと……。

神戸はよくモダンで、エキゾチックで明るい街だと言われる。旅先などで、神戸に住んでいると言うと相手からはきまってしまうが、

美しがられたものである。最近では必ずしもそんな賛辞を素直に受け止められないように思う。

かつての神戸は確かに街全体が背後の山や港とよく調和し、しかも神戸独特の個性的な味を持っていて、油絵のモチーフとして恰好の情景を作っていた。それが異常な迄の急ピッチの経済成長とそれに伴う自然破壊や公害の影響で、何かカサカサした、特長のない画一的な街になり、その景観も一変した。

宅地造成の盛んな須磨や垂

水の奥で緑が根こそぎ削り取られ、赤土が露出して一面の砂漠と化してしまった風景によく出会うが、その後には決して何とか団地と言うボール箱を並べたような味気ない街が出現するであろうが、も早やそれは何処にでもある有りふれた街に過ぎない。

東灘の海岸では巨大な埋立地がかつての砂浜や松林を呑み込んでしまつて何の風情もない埃っぽい荒地になつてしまつている。何世代にもわたつて受け継がれた自然な市民共有の財産であり、一旦壊されるともう元には戻らないのに、止まる所を知らない経済成長の波は今日も明日も我々から山を奪い海をもぎ取つて行くのである。

そんな中で、しかし一寸注意して歩くと、意外な処で、意外な古物風景に出会うことがあり、あそここにまだ神戸があつたと感ずるのである。

戦前から安くてうまかつた南京町のブタマン屋がハイカラになつた元町の裏に、今も昔の儘の店構えでひっそり残っている。すこしアカじみたノレンも昔の儘なら、店の中の脂のしみ込んだ素朴な机や椅子も相変らずの健在で、正に古物神戸である。その横丁の中華料理を売る店にしても、表のガラス戸と言ひ、陳列窓と言ひ、戦前



メリケン波止場の鉄橋（スケッチ／山崎朔三）

の面影をその儘伝えて残っている。赤錆びた自転車が一店先に投げ出すように置かれてあったのも如何にもこの店らしく面白かった。

メリケン波止場一帯も、エキゾチズムとモダンイズムを合わせただよわすムードであるが、ここに恐らく明治か大正の頃に出来たと思われる古色蒼然たる鉄柵が残っているのが嬉しい。阪神高速の高架道路が通じてから山に向っても風景は死んでしまったが、この鉄柵越しに見る港は仲々好ましい構図を作ってくれる。

しかし、こんな古物風景が日に日に消えて行くのは、神戸に住む絵描きとして残念で仕方がない。

## 「水煙」

### と城

小泉八重子

〈俳誌「潮」同人〉



白鷺城で知られる姫路で生れ育った私は、幼い頃からお城が大好きでした。私の家は、城が最も美しい姿を見せると言われる城の巽（東南）にあり、そのアングルか

らは大天主閣、小天主、百間廊下と立体的な稜線が松の緑に映えています。朝夕見上げる城は、すでに幼い私を完全に包みこんでいて、私の図画にはどの画にも背景としてその角度からの城が描かれていました。

やがてバックに城を描かなくなり、少しだけ本も読み、少しセンチになり、少しものを想う頃に城の傍に行くのと、城はいろいろなことを語ってくれました。日と時刻によって表情を変え、過ぎ去った長い歴史の重みに耐えながら、明滅の絵巻をくり抜けて見せてくれました。

姫路を離れ、又年を重ねると、私の幻想の中に蘇える城は、いつか「落城」のイメージに変わっていました。若き日に語り終えた城はその最も美しい終焉として、夕焼け色の炎に包まれた姿の中から婉然と微笑んでみせるのです。

ふるさとを共にする赤尾兜子氏というすばらしい師を得て俳句を作り、十五年間の作品をこの夏、句集にまとめました。その題名には「城」にまつわるものを……と思いましたが、幼時からの私の内部に微妙に変化しながら生き続けた城の姿を、句集名として適切に表現する言葉がありませんでした。そんな時、先輩のW氏から「水煙はいかが……」と言われまし

た。何か象徴的な感じが私とつながるとのことでしたが、城と塔、偶然のこの美的な類似に私は驚きました。

塔の先端の飾りである「水煙」は当時の人々が塔を火災から守るため、火を鎮める願いをこめて焔の形にしたといえます。ドラマチックに歴史を燃やす城の炎上に比べ、塔の炎上は垂直に火を噴きながら悪霊的な妖気をまくでしよう。そんな幻を抱きながら「水煙」が見事な薬師寺を二度訪れました。

はじめは抜けるような秋空の十一月、二度目は陽ざしに疲れが見えはじめた晩春でした。「凍れる音楽」と評された塔は、さすが清烈な神秘さと気位を備えながらも不思議な安らぎを人に与え、その尖端に輝く「水煙」は華やかに翅を上げ、飛び翔とうとしているかのようにでした。

おずおずと感いながら作った句集でしたのに、驚く程の好意が寄せられました。私は今それらの好意を素直に受け、人の心のあたたかい襲いの中で経験したことを大切に持っていたいと思っています。そして贈られた思いがけぬ多くの言葉の花々を思うにつけ、私も機会ある毎に他の人に対して、つたない言葉も惜しまず贈らねば……と思うのです。

## □ある集いその足あと

### あじさいグループ

南 俊子

〈あじさいグループ世話人〉



なごやかな会場の練習風景

ちょうど四年前の、あじさいの花咲き乱れる頃、此の会が発足いたしました。神戸の市花に選定されたところでしたし、すんなりと「あじさいグループ」と名付けました。花言葉は「移り気」と聞いており、一寸ひっかかりを覚えましたが、そこは練習会なので、出来るだけ色々な方と踊って頂きたいと思うところから、パートナーチェンジということに意義つけて、一本のダンス愛好という軸に多くの清楚な可愛い花が、ピンク色と紫色も仲よくまあるく咲いている和やかさを心としています。私の友人は主に女性なので、十

年位前パーティでお世話になった

K氏のご紹介で知合った県庁の田中昭氏に、一緒に世話人になって男性を誘って頂くことにしました。他に私の妹、小室登美子と主人論造との四人が世話人です。

#### 〈会則〉

一、本会は会員の親睦と健康を希って、ボールルームダンスの発展のために尽します。

一、会員はすべて世話人が紹介した方及びその方々の友人です。

一、原則として月一回、日曜日(午後一時―五時)に会を開きます。

一、会員は必ず、全員をパートナーといたしましょう。

一、練習会ですから、女性からも申込んで下さい。活気ある品のよい会でありますように。

そして、会場は主に三宮の市民生協会館四階、松風の間を、年に一、二度のパーティ(パースデイとクリスマス)の時は、二階大ホールをお借りしています。結婚式優先の聖光殿なので、仏滅の日曜日です。第二とか第三とかに決めていると、私共はとても楽なのですが、その月により仏滅は変わりますので苦勞があります。

十人か二十人で割勘で会場費を払って―と思つて始めましたが、只今の毎回平均出席者は六十名前後、登録会員は五百八十名を越えました。二十歳前後の若い華かな方々から、私共のような年配の者

まで真にダンス愛好の集いで、昔からの私の理想、父と娘、息子と母というような、ほほえましい雰囲気です。

楽しい中にもダンスは全くの正

統派ばかり、イギリス宮廷から発祥した社交ダンスですから全世界に通用するものです。時々、兵庫県舞踊教師協会の先生に講習して頂く日もあり、全員で輪になってタンゴ、チャチャなどをフォークダンス風に踊ることもあります。昨年のクリスマスパーティに、全員で九ちゃんのジェンカを踊って、下まで響いたと事務の方からお目玉を頂きました。でも日常の煩雑さを総て忘れて、皆無邪気な笑顔で踊っています。

今年の二月、会員のT君より結婚通知の葉書が届きました。印刷の余白に「あじさいの会で知合ったIさんと結婚しました。これからもどうかよろしくお願ひいたします」とペン字。嬉しいことでした。二月の練習日に全員で祝福、ささやかなプレゼントを会からさせて頂きました。他にも二、三カッブルが出来ているようですが――八月に申出て下さったO君ご夫妻に、九月二十三日にお祝を―と思つています。お幸せにと祈ります。雰囲気抜群、つつましい練習会です。

連絡先 灘区上野通二丁目一―一九 南俊子

(電話八六一―六四九〇)



●三宮の楽しいショッピング・オフィス街への出勤に  
**末積カーポートビル** 近代的な  
 立体駐車場 150台OK



●普通車30分＝¥100

スピーディな駐車 親切な応待—

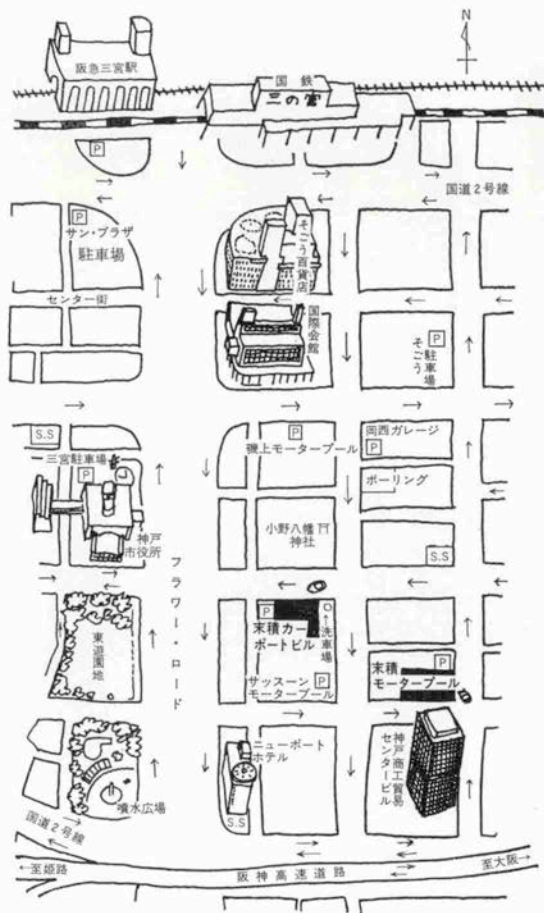
- 冷房完備・TV付の  
待ち合い室もあります。
- あさ8時——よる10時(日・祭日営業)



# 末積株式会社

神戸市葺合区磯辺通4丁目6番地ノ2

TEL 078 (221) 9 8 8 7



□れんさいずいそう〈10〉

# 月下美人

楠本 憲吉

〈俳人〉

え・貝 原 六一

〈行動美術協会々員〉



今年も石田博英氏からご愛蔵の「月下美人」の一鉢が送られてきた。

頂いたその夜、二十四時、家族たちの見守るなかで、花はふるえながら、濃妖な香を放ちつつ、開花した。見事な開花であった。

折から十三夜の月が煌々と空にかかり、天と地の呼応をそこに見る思い、その対話をきく思いがした。

私はカルロス二世というとおきのスペイン

製のプランデーの栓を抜き、月下美人に乾杯、次の一句をモノにした。

妖とひらき煌と香りぬ月下美人

ところでこの「月下美人」だが、これに関する文献がない。「広辞苑」にも「大言海」にも「大日本国語辞典」にも出ていない。私の持っている植物図鑑類にも皆目見当らない。

やっと平凡社刊全二十四巻の「大辞典」に出てきた。

月下美人、クジャクサボテンを見よとある。クジャクサボテンを引くと

#### 孔雀仙人掌。

サボテン科の肉質植物。茎は角柱状をなし、或は球状。多くの葉状の短枝を出し下垂す。枝端に一花梗を斜上し大形の内麗なる白色花を開く。

南米原産。観賞用温室植物。別名、ゲツカノビジン。

とあった。さすが大辞典なるかなと思った。

私がかつてこの「月下美人」の素晴らしくてかいのをタイのバンコクで見ることがあった。

私の畏友、バンコク在の森島要さんの邸宅の庭である。

「多いときには三十も一晩に咲きますよ」

と氏はこともなげにいわれたが、私はその花の豪華な競演に目のくらむ思いがしたのであった。

この森島邸をたずねて、私は、すっかり氏の生活ぶりがうらやましくなりました。

庭にはバナナが茂り、ブーゲンビリアが咲き乱れている。パタヤ海岸から採集された、生きたサンゴがブラックライトに照らされてずらりと水槽に息づいている。

そして家のなかには、かわいらしいスローロリー(猿)が遊んでいる。九官鳥も犬も同居している。

まさに脱都会、いや脱日本の優雅な生活がそこ

にはあった。だいたい私は動物が大好きだから、こんなにあくさんの動物と一緒に暮らせるといふことにまづびっくりして、ため息が出てしまった。真つ黒に日焼けした氏は、静かな口ぶりで庭内を案内してくださった。敷地はざつと八〇〇坪、單身赴任だから、生活はいたって簡素である。男ひとりの生活はいいものだ。

氏は目下サンゴを十二種類飼っている。

サンゴは腔腸動物で生き物である。装飾用の赤サンゴとは別で、氏の飼っておられるのは造礁サンゴ。ちょっと見ると枝や葉のつき出した植物のように見える種のことである。

氏の話では、はじめてサンゴに接したのは、バンコクにやってきた九年ほど前のこと。

パタヤ海岸で、キューピーオーム(イバラカンザシ)を見て以来のこと。

「変わっているんですよ、サンゴという奴は。尤も私も変わっていますがね」

と氏は目を細められた。

動物とはとても思えない特異な形をしている。動けないくせに、ちゃんと餌を一日にアサリ二キロも食べて、一年に二センチは伸びてゆく。――

サンゴと月下美人と。

私は美しいものはいいなと思う。そして美しいものには微妙な味があると思う。

美と微と味と。

この三要素の連続であると思うのだ。



筆者

□れんさい随想〈11〉

# ブラジル

# 無宿

津高 和一 (絵と文)

△画家・大阪芸術大学教授▽

おもえば、最初ブラジルに渡航したときから今年で十五年目になる。それ以後、近年にも二回連続して個展のために渡航した。そのつどおもったことは、このスローテンポのブラジルも国際社会の激動に歩調を合わせ変貌しつつあるということだった。地下鉄工事が随所で道路を掘り起していたし、高速道路が都心を縦横に走り、立体交叉で街は見違えるばかりに変容していた。のんびりしていた独特の人情風俗も徐々に先進国の様相に似てきた。だが、まだまだ日本とくらべると、大

ような余裕のようなものを残していた。用捨なく流れた歳月を肌で感じたことは、日系二世たちの目覚しい活躍ぶりである。また日本から進出している商社、企業体の青年社員たちとが好対象でもあった。日系二世たちは、ブラジル人たちからはジャポネ、として受けとめられ、一世



w. M. T. a. k. e

たちからは、ブラジレイロ、として処遇を受けていることだった。いまのところはそのどちらにも属さない中ぶりんでもあった。また、画家であり、芸大教授という職業のせいかな、僕の視覚に映じた彼等は、実益とまらない芸術には無縁である者が多いということだった。

あまりにも茫大な国土の、あらゆる分野での空間のスケールの大きさが立ちふさがっていてそれに闘志を燃やし、関心をもつものがあまりに多すぎたからであらうと思われる。

芸術に関わることは単なる人間や自然の一小部分を占めているように反映しているのかもしれない。反面、現実に作家活動をしている日系人たちも、幼少年期か、或は青年期に日本で何等かの芸術との接触をした人々に限られていたのも面白い現象でもあった。



これは異民族たちのブラジル移住の歴史の深淺と、文化に対する重層と比重の相異によるともいえた。ヨーロッパ系移住民たちは四百年を経過していた。七十年の歴史しか持たない日系人たちの違いがその辺にもあった。

その意味でも先ず物質文明に対する拠点とか、文化に対する焦点距離のちがいをまざまざと現出しているともいえたのである。

精神的な拠点として欲望すること、願望することの必然を、身をもって体得してきたヨーロッパ系移住者の子弟たちの心情が、彼等の芸術への志向となり、コソコソと堆積させる習性が地味ではあったが身についていた。

それに引きかえ、十五年前僕がブラジルに行った頃、同好会的な日曜画家たちであった日系画家たちの集団が、芸術家と称する人種の絶対数不足もあって、需要と供給のバランスを巧みに埋める役目を果していたことである。それも日系人コロニーに限られていた。日本や諸外国の側から見ると嘘のような事実であったが、この現実は、また、日本でごく最近まで続いていた美術ブームという珍現象と、何処かで相似していた。

勿論、芸術はシチメン、ドクサイものではない。だが、売ればよい、というものではなかった筈であった。ある種の日本の画商たちが、「売れる絵は良い絵」であり、「良い絵は売れる」という論法からゆけば、僕などがとやかくいうこともないのであった。真の芸術は得てしてその逆をたどる例がこれまで多かった。さて、僕は芸術の本質論をいうためにこれを書いているのではなかった。ブラジル無宿人としていいたいことを、いい

たい風に行きたくてであったからである。

ブラジルに行けば長くて八ヶ月、短くて三ヶ月がこれまでの滞在日数だった。最初はインカ帝国の滅亡の地、ペルーが主目的で、ブラジルは根拠地の心算であったのが、いつの間にか不定期だが自作の発表の場になってしまっていた。それというののもなんとすることも無い気安さが、足をむけさせるのである。

かつて神戸で気ままな茶房を経営していたU氏の奥さんからはいつも夕食の招待を受けた。サンパウロ大学教授のS氏、禪寺のS氏、画家のM氏、W氏等数えあげれば際限がないほどだった。三〇〇キロも離れたアリアンサ共同農場のU氏の底抜けの善意は、運転手づきの自動車を走らせて迎えてくれたりした。

リオ・デ・ジャネイロのクラブへKギャラリーの主人と一緒に食事に行ったときなど、廊下で出会った老紳士から「コモバイ、ツタカ」といわれて握手され、とまどったこともあった。かねて僕の作品を所持してくれているコレクターだったのである。かつて政府の重要なポストにいた人だということの後で聞いて、薄れた記憶をたぐったりしたものである。気持ちのよいことは、日本のように地位や権威をひけらかす人士の少ないことが何よりだった。

変らない友情のようなもの、あるいは芸術に対する関心の深さのようなものは、悲しいことには日系人たちの成功者たちには見当らないことである。いつも何処かを流れながら、街に立ち、行き交う群集の渦の中にいるときも無宿人のありがたさをいやというほど感じさせられるのであった。

# わが音楽の原点

——日本のことを求めて——



黛敏郎

(作曲家)

このたび落成した生田神社社会館で、このほど黛敏郎さんの講演が行われた。黛さんは〈涅槃交響曲〉や〈天地創造〉の映画音楽などで知られる一方、〈題名のない音楽会〉でユニークな活躍をされている。終戦まで横浜で育った黛さんは、同じ港町ということで神戸にも愛着をもっておられる様子であった。以下は、当夜の講演から音楽に対する黛さんの基本姿勢のうかがわれる箇所を編集部でまとめ、紹介するものである。

◇ 私は音楽家であるので、本来なら音楽でもって語りかけるべきであり、言葉で伝達するというのはおかしなことであるが、それは、音楽は具体的なものごとを伝達する機能をもっていない抽象芸術であって、具体的な事物を表現する能力がないからである。文学的要素、演劇的要素が加味されてはじめて音楽は具体的な事物を表現し伝達する機能を得るのである。だから、私にしても時としては具体的な事物を表現したい、自分の意思をもっと

適確に言葉、あるいは、文字でもって伝達したいとの気持ちが強くなる。特に昨今、私が言葉でもって私の考えていることを表現しているのは、これまで日本人は、日本人であるにも関わらず、日本人であるという意識、あるいは、日本文化に対して、余りに無知であり、大事にできなかったのではないのかという反省に立ってのことである。

◇ 音楽は翻訳のいらぬ芸術である。たとえば、私が今日作曲して発表したシンフォニーとかオペラというものは、明日中には世界中に広まり、ニューヨーク、パリ、ベルリンでさまざま評価を受けることができる。これは小説や詩の考え及ぶことのできない音楽だけがもっている特殊性、特長だと思う。だから、そういう特長をもった芸術に従事していると、ものごとを考えるときに、日本国内という限られた空間だけでなく、世界中の反響というものを考えるようになる。つまり、自分がこの曲を

発表したら世界の楽団はどのように受け入れてくれるだろうか、どういう悪口が、反応があるだろうかということをたちどころに考える。したがって、どうしても国際的な視野に立たざるを得なくなる。日本人だとか、東洋人だとか、そういう限られた状況のなかに自分を閉じ込めないで、むしろ、広い眼で世界をみて、そこに自分の作品というものをみていこうという習慣が自然にできてしまう。

二十数年前、私がパリへ給付留学生として勉強に行つた頃もそうであった。若者らしい気概にあふれていて、自分はたまたま日本に生まれた、しかし、日本は音楽的には後進国だ、音楽の本場はヨーロッパだ、だから、ヨーロッパに來たからには日本人であるという意識はかたがかりすて、日本へ帰ろうなどということは考えもしないで、フランスに骨を埋めるつもりで頑張ろう、フランス人になり切ろう、ヨーロッパ人になり切ろうという気概をもっていた。ところが、段々に研鑽をつみ、実際に作品を発表し始めてから、私は自分の考えがどうも間違っていたのではないかという事実に向直した。

芸術というものは、本来、非常に独創性と個性を要求する性質のものである。人真似では一人前の芸術家として誰も認めてくれない。どんなに素晴らしい絵を描いてもそれが明らかにピカソの真似だと分る絵なら、世界の画壇は誰も相手にしてくれない。どんなに素晴らしい音楽をつくっても、明らかにそれがストラヴィンスキーの真似だと分っていたら誰も相手にしてくれない。どんなに拙なくても、その人だけの独自性をもった表現、個性がない限り芸術作品としての価値はゼロである。

それでは、私なら私の、他人に絶対真似のされない自分だけの独自の個性、独創性というものは一体何によって形づくられているのかと考えてみると、そこに私が所

属している民族性、その民族が今日まで育て伝えてきた文化の伝統、感受性、歴史とか、そういうものが抜き難くもっている重みが私の上のしかかってくるということを感じないわけには行かなくなつたのである。

私の作品にしても海外で高い評価を受けているのは例外なく西洋人の作曲家には考えもつかなかった独特な表現、音やリズムの扱い方をもっている曲で、そういうものを西洋人の批評家が非常に高く評価してくれる。これは何もフジヤマ・ゲイシャガールのな外面的な面白さというのではなくて、もっと深い精神性、西洋人とは違つたものの感じ方、音の扱い方というところを世界の音楽愛好家や音楽批評家は高い評価をしてくれる。それに気づいた私は、遅まきながら、自分の考えが誤っていたと考えた。つまり、私にとつて一番大事なのは外国で得た技術の勉強もさることながら、それを使いこなすもつと充実した自分自身の内面性、精神性であり、それらを成立させているのは他ならぬ私しかもつていない、私を生み、育てた日本の風土であり、東洋の思想であり、もの考え方であり、感受性であるということによりやくにして気づいたのである。

そこで私は、東洋の思想、日本の古典、芸術文化、伝統などの勉強を始め、今日に到るまでズツと続けている。私は過去十数年来、そういつた考えの下に自分の作品をつくり続け発表を続けている。今のところ、これといった成果も上っていないが、しかし、私のように考え、勉強を始めた日本の若い作曲家が年々増えており、その作品が海外で成功を博する率も年々高くなっている。それは私の考えたことが決して間違つてないということになるのだと思う。

私の音楽の原点——それは、この「日本」である。

(文責編集部)

おんがら屋



きものと細貨

おんがら屋

神戸

西店/三宮センター街・電話 331-8836(代)

東店/三宮センター街・電話 331-0629

三宮店/さんちかタウン・電話 391-4303

東京

銀座コア店/4階着物コア・電話573-5298(代)

渋谷東急店/5階和装名家街・電話462-3409(直)

日本橋東急店/4階和装名家街・電話211-0511(代)  
(内線294)

池袋バルコ店/4階着物小路・電話987-0561(直)

手づくりで仕上げたお菓子の宝石

新 栗



古い老舗に新しい味覚

神戸



元町

風月堂

神戸市生田区元町3丁目195

TEL. 391-2412~5

# 神戸の思い出、今、昔

鳴坂 健二 〈山陽電気鉄道株式会社社長〉

小野 忠雄 〈ピオフェルミン製薬株式会社代表取締役〉

★神戸と共に育った山陽電鉄とピオフェルミン

鳴坂 私は今の山陽電鉄ができました年に生まれたんですよ。明治四〇年七月に兵電という会社ができて、その当時の川西清兵衛さんが創立発起人でした。兵電が昭和二年に宇治電になり、昭和八年に現在の山陽電鉄になったんです。その昭和八年に私、学校を卒業して今の電鉄に入社したんです。ですから生まれた時に会社ができ、称号が変わった時にこの会社に入ったものですから何か因縁のようなものを感じますね(笑)。

小野 その頃は西代が本社でしたか？

鳴坂 ええ、兵電時代から西代が本社でした。今年はその創立六十五年になりますから「山陽電気鉄道六十五年史」を先程出版いたしました。

学校は同志社なんです、その前に中学を出た時に神戸高商に試験を受けに来たんです。ところがすべりましてね(笑)。その時に神戸の町を初めて見たんです。それが大正一五年ですかね。初めて神戸の町を見た時に、田舎の方から出てきたものですか、非常にきれいなスマートな町だなあ、と思いましたね。その時はまさか神戸で就職して今まで住むようになるとは思いませんでした(笑)。

小野 今の会社にお勤めされて何年になりますか？

鳴坂 昭和八年からですからもう四〇年ですね。それが第一回の「港まつり」があった年だったんです。昭和八

年というのは。あの当時は十一月三日を中心としておまつりが行なわれてましたね。

小野 私の会社は山陽電鉄さんよりも会社としては若いですね。大正六年にできましたから。このピオフェルミンも欧州戦争で日本にきていた薬が来なくなっただけで、当時の知事が「日本にもこういう薬がほしい」と考えられたのがキッカケでできたわけです。

昨年で五十五年になります。私は神戸で生まれて神戸で育ったんですが、中学も関西学院なんです。でも関西学院に入られた時はとても不愉快だった。というのは雲中小学校から一中を当然受けるべきだったんですが、私の家がクリスチャンだったので一中も二中もどこも受けさせてもらえずに親が関西学院にほおりこんだんです。それで私ふてくされてテニスばかりしてました。だから私、学校で何習ったのかと聞かれますと「テニスやってました」といつてるんです(笑)。

私、学生時代にラケットさげて上海に行った時にお腹をこわしまして、それがピオフェルミンのおかげでなおって帰ってきたので今の会社へ入り、今日で五〇年ほどになるわけです。

鳴坂 それは昭和の初めですか？

小野 私の入ったのは大正十一年です。それから一度浮気したんです。大阪へゼネラル・モーターがきましてそこへ行ったのですが、どうも外国人の会社というのは具合が悪くて舞い戻りました(笑)。



鳴坂 健二氏

## ★兵庫が神戸の中心だった頃の思い出

小野 私はずっと神戸にいますけど、昔の神戸というのは元町から西が中心だったんですね。もう一つ前の事を聞かされますと兵庫あたりが中心のようでした。兵庫から西へ山陽電鉄が出ていたというのも、兵庫までは人がきてたんです。明治から大正のはじめは湊川神社のあたりに中心が移ったようです。

鳴坂 明治四〇年にどこに終点をつくるかという時に、今の環境からみてあんな所に終点をつくるというのはちょっとわかりませんね。兵庫に終点をおいたということはあるの辺が神戸の発祥地だったんでしょね。

小野 二〇年も後だったら元町あたりが起点になっていたかも知れませんね。

鳴坂 私が大正一五年に神戸高商を受けに来た時は、まだ国鉄を横切って相生橋の上を市電が通っていました。

それが六年間京都にいて神戸に就職した時はもうそんなものはなかったですよ。高架工事がもう進んでいまし

た。昔の神戸駅とか三宮駅とかがフラットにあった頃は赤レンガの建物で、なかなか趣きのある雰囲気でした。ああいう明治の風格を残した赤レンガの建物は最近の近代的な建物の中には全然見当りませんね。昔は上筒井の終点まで電車が行ってて、その向うが関西学院で、その坂をずーっと上りましたら神戸高商があって、あの辺りの雰囲気は非常によかった。

小野 阪急の終点が今の護国神社のもう少し西でした。その上が神戸高商だった。

明治の頃は先程いきましたように兵庫が神戸の中心地で、新開地から東はそれほど栄えてはいなかった。私は熊内に住んでいたんですが、姉が兵庫に嫁いでまして、「今日は兵庫へ行ってくる」なんていってました。兵庫の人は「今日神戸へ行ってくる」といってましたね。七〇歳以上の兵庫の人は今でもそういういますね。

鳴坂 これはおそらくこの都市にも共通したことじゃないかと思いますが、映画が斜陽化したことが都市の繁華街の地図をぬりかえることになったんじゃないでしょうか。といいますのは、神戸でいえば新開地ですよ。あそこは映画館の街です。夜の十時前後といえますと映画のはね時ですから、ものすごい雑踏でした。聚楽館ができた時は、ものすごいものができたもんだとびびくりしましたからね。あれは昭和四、五年じゃないですか。それから京阪神三都市に「松竹座」というのがありまして洋画の封切館でしたが、立派なものでした。

小野 戦後は「やみ屋」が神戸の町を西から東へ連れていったんじゃないかと私は思うんですね。まだもっと東の方へいろんな意味で発展するんじゃないでしょうか。鳴坂 市電がなくなっただけということが大丸の立地条件、



小野 忠雄氏

元町の立地条件を変えましたね。昔は元町一丁目から六丁目までの間とトアロード、それから新開地が神戸のショッピング、娯楽の中心地だったんですね。センター街というのはまだなかった。ですから大衆の流れというのは足場がやはり問題の中心になるんじゃないでしょうか。小野 遊ぶ場所も新開地や福原が昔は中心だった。花隈もあつたけれども高級すぎて若い者はちょっと出入りができなかった。それが戦後は三宮のバー街へと東へ移ってしまつた。カフェーなどは昔も上筒井にもありましたが、ぜいたくな遊びといえは上筒井へ行つた(笑)。鳴坂 三宮附近から上筒井附近にかけては外人の船員さんがよく行つたので、洋風な感じが強かつたですね。小野 神戸は明治時代からスポーツが盛んな町でした。YMCAは早くからバレーやバスケットボールをとり入れてましたし、それにKRACと称する外人の運動、社交クラブがあつて、野球はもとよりサッカー、ラグビー硬式テニス、ホッケー、クリケット等を楽しみ、クラブハウスには今流行のボウリングもありました。岩屋の浜にはヨットハーバーがあり、塩屋のクラブハウスでは老人

がクリケットをやり、土曜の宵には華やかな社交ダンスパーティが開かれました。こういった影響で神戸にはスポーツ文化が他都市より早く育つたように思いますね。

★神戸らしさとは？

鳴坂 それにしても近頃はもう神戸も大阪も東京も、その都市としての特徴がほとんどなくなつてしまつたという感じを受けますね。特に私のように田舎に育つた人間は、吉田首相じゃないけれど、白タビはいて葉巻を吸うといった和魂洋才のようなムードにあこがれをもつていたように思うんですが、戦後鹿児島へ行つても青森へ行つても札幌へ行つても何のムードも変化もないですね。神戸だからといって特別何か感じるものもなくなつたよ

うな気がします。この前札幌に行きましても東京にいるような錯覚を受けましたからね。そして札幌の人がこういうことをいいました。

「神戸市は人口一三〇万で、札幌は一〇〇万です。北海道五〇〇万の人口のうち二割が札幌に集まっています。札幌

は年々人口が急激に増えているので六大都市に札幌が入り、神戸は七番目になりますよ」とね。そういわれて、そうなるかもしれないな、と思ひました。小野 本場に「神戸」という特色がなくなつてきましたね。たとえば神戸から東京へ物をもつていくにも持つていくものがなくなりましたよ。神戸から何もつていって東京にみがあるんです(笑)。昔は「うまいもの」というと兵庫にあった。それが今でも残つてい

るものもありますが、これは東京にない。だから昔からあつたよきものというのはもう少し神戸の人は育てていかな

いかなような気がしますがね。

鳴坂 この前ちょっと弘前の町へ行った時、うらやましいと思いましたがね。あの弘前市の一角に昔からの弘前の町が残っているんです。これを見た時、我々関西人の眼から、本当の東北の町を見たという感銘を受けました。

私は子供の時に、神戸に親戚がいましたので父が神戸からのみやげによく高砂屋の「きんつば」を買ってきたくれましたが、それをたべてこんなにうまいものが世の中にあるものかと、その味が頭の中までしみこんだことをおぼえています。神戸へいかないとそれは買えなかったんですね。今はこの都市もみな同じ型にはまったみたいになってしまった。

小野 私いつでも思うんですが、大阪の新歌舞伎座ですね。あれ一カ月のうち25日とか27日とか昼と夜とあってるんですが、神戸だと三日とあってない。やはり神戸は昼からでも芝居を見に行こうという階級がないんですね。ほとんどがサラリーマンですから、店まかしといていこか、というわけにいかない。神戸はそんな町ですから大阪や京都と同じようなわけにはいきません。サラリーマンの町という性格はしばらくはかわらないでしょうね。

鳴坂 全国を転々とされる銀行や証券会社の支店長にたずねてみますと、「京都と名古屋が一番難しい。神戸が一番よろしい」といわれますね。というのは神戸にはひとつこい伝統がないからつき合いやすいし、仕事がしやすいんですね。京都の支店長は難しいそうです。

小野 葉を売ってもそうですね。神戸の人はすぐ飛びつくかわりに、すぐ嫌にもなる(笑)。新しいものにパッ



悪い出唇に花が咲く鳴坂さん(右)と小野さん(左)

ととびつくけれども長もちしないんですね。だから売っても広告してブッシュュしていかないとすぐ別のものになってしまう。神戸人の気質というものは京都人や大阪人のようにはつきりしてないようですね。

鳴坂 私は職業柄特定のお客さんがないので、商売からみた町の性格というのはわかりませんが、沿線の都市のなかでは財界人の集まりなどで、あの人とあの人はひとつのグループで、この人とこの人はひとつのグループだということをよく見きわめた上でもの言はないと、とんでもないことが起ることもあるわけです。これはやはり城下町としての性格でしょうね。そういう所はかえって難しいですね。

ところで、これから全的に均衡のとれた神戸の町づくりをしていくのはなかなか難しい課題ですね。中心が東へ移ってしまいましたから西神戸というのは閑散としてますしね。最近、新長田とか板宿地区の都市改造に市も力を入れておられるようですし、今、西神鉄道を着工しておられますが、これが西神戸の発展に役立ってくれるば嬉しいですね。

小野 もう着工してますが、市営の地下鉄が伊川谷から小野浜まで伸びますね。こうなると神戸の住民のあり方というものも変わってくるんじゃないでしょうか。

鳴坂 今四つの地下鉄が考えられているんですが、市電がなくなってしまうので、大量輸送機関としてはもう地下鉄以外にはないでしょう。

いずれにしてもこうした大衆の足である輸送機関が神戸の町を少しづつ変えていくことでしょう。

〈補公会館にて〉

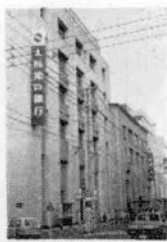


## 経済ポケット ジャーナル

★十月一日から

「太陽神戸銀行」が発足

二年前の第一勧業銀行に  
続く都市銀行同士の大型合  
併として注目されている  
「太陽神戸銀行」が十月一  
日から新しいスタートをき  
った。



太陽神戸銀行

同銀行の資本金は四百九  
十億円、従業員一万六千人

預金量は三兆四千九十二億  
円（八月末現在の神戸・太  
陽両行の合計）で、東海銀  
行に次ぎ都銀第七位の中心  
行に躍進、また金融機関の  
生命線ともいへべき店舗網  
が国内三百二（うち出張所  
三）海外三、合計三百五店  
に上るのも大きな強味。と  
くに首都圏、近畿圏を中心  
とした国内店舗三百二はト  
ップ銀行の第一勧銀と同数



しかも重複のため統合した  
九支店が一、二年中に配置  
転換で戦力化して行くため  
実質的にはわが国最大の店  
舗網を誇ることになる。

しかし重要なことは地元  
銀行としての責任で、経済  
の中央集中が進む中で、太  
くなくなった資金供給パイプに  
対する地元業界の期待にと  
うこたえていくか、とくに  
金融引き締めの影響がこれ  
から本格化して行くだけに  
新銀行の役割は大きい。

なお、発足にあたって、  
会長に河野一之氏をはじめ  
初代頭取に石野信一氏、副  
頭取に藤井慎作、宮崎十一  
両氏らが就任した。

### ★73 J C 兵庫ブロック 会員大会開催

今日の多岐多様化する社  
会の中で J C のメンバーと  
して、一人の兵庫県民とし  
て何を考え、どう行動すべ  
きなのかを話合うため、九  
月十五日午後一時から新築  
なった生田神社会館で県下  
の J C メンバーのうち約五

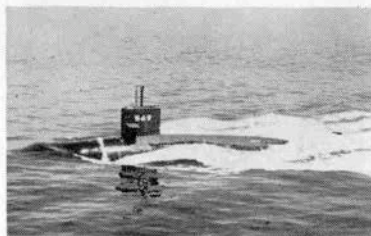
百名が参加して「73 J C 兵  
庫ブロック会員大会」が開  
催された。

第一部は式典で、第二部  
のシンポジウムではまず、  
「力強い明日の兵庫づくり  
を」をテーマに神戸大学の  
米花稔教授と嶋田勝次助教  
が基調講演を行ない、分  
科会では「県土の改創」と  
「高福祉社会への道」のそ  
れぞれのテーマのもとに一  
谷定之坂副知事も出席して  
熱心な話し合いが行なわれ  
た。

第三部の懇親会では、デ  
カンショ節、義士太鼓、獅  
子舞などの郷土芸能が演じ  
られ、華やかに幕を閉じた

★潜水艦「なるしお」引渡  
九月二十八日、三菱重工  
神戸造船所第六岸壁で、防  
衛庁潜水艦（八〇八四号  
艦）「なるしお」の引渡式  
が行なわれた。

「なるしお」は四十六年五  
月に着工され、昨年十一月  
に進水式を行いドック入り  
していたもの。  
全長七二メートル、基準排水量



潜水艦「なるしお」

一八五〇トンで乗員定数八〇  
名。魚雷発射管六を搭載し  
スノーケル装置をそなえて  
おり、水中二〇ノット、水  
上一二ノットの速力で航行  
する。

### ★ KOBE オフィスレディ ★



山田 恵子さん（20歳）  
株本高砂屋人事部

勤めて3年目。仕事にもすっかり慣れて、OL  
生活が板についてきたこの頃。人事部の中では最  
年少ゆえみんなにかわいがられて幸せだし、寮に  
帰れば仲間と楽しいおしゃべりで、家から離れて  
いても寂しさを感じないという明るい彼女。お休  
みはショッピング、ハイキングと忙しい。もう2  
年勤めてお見合ひしようかなあと考えてもいる  
けれど。  
（兵庫県立山崎高校卒）

★旅のご相談は

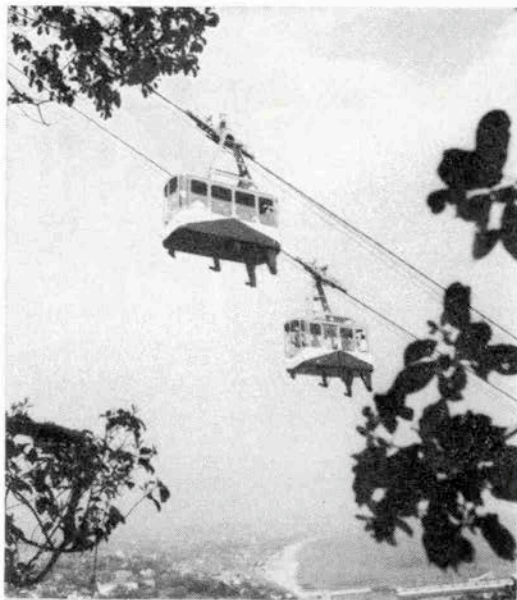


山陽交通社へ★

海と山 自然のなかの 須磨浦山上

# ● 須磨浦ロ-フ-ウェイ

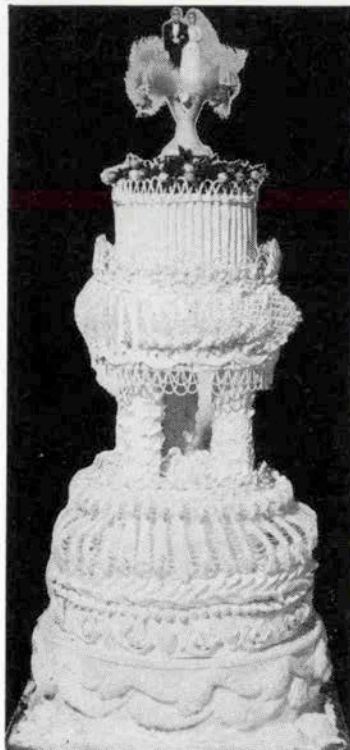
山上からは 須磨の白い渚・西神戸・大阪湾の  
すばらしい眺望が楽しめます——



## 山陽電車

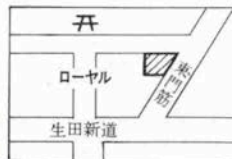
須磨浦公園駅下車  
(阪急・阪神直通)

おめでとーございます



御結婚

ご予算に応じて各種ケーキの予約  
を承ります。



神戸三宮生田東門筋  
TEL. 331-5628

# ★技術ジャーナル ⑦⑧

## インチスクラップ法

(INCH-SCRAP)

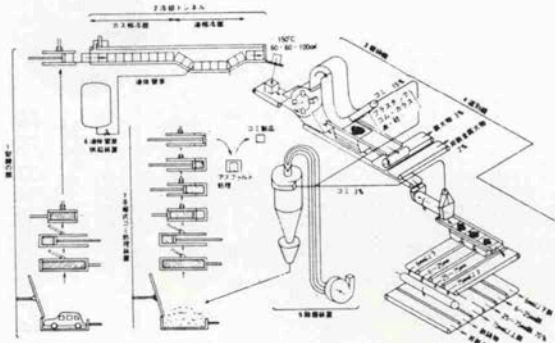
諸岡 博熊

〈阪神外資埠頭公団工務部長〉

ポンコツ車は、プレス機で圧縮したり、シュレッダ機で破断されたりして、いわゆる機械的な処理法で処分されている。ところが、この方法では、二次公害が発生するなど多くの問題点をかかえながら、新しい手段が見つからないまま今日にきた。

これに対して、このたびインチスクラップ法という理想的な処理

### インチスクラップ法フローシート



提供・帝國酸素株式会社

法が開発された。今後、家庭からも、電化製品関係の粗大ゴミが多量に発生すること考えられるので、公害防止、資源回収の面からみてもこれに寄せる期待は大きい。

× × ×

この方式の特長は、従来の方法にみられる事前処理を必要としないことが第一にあげられる。いわゆるポンコツ車から、タイヤ、バッテリー、エンジンなどを手分解する必要がないことである。第二に鉄と非鉄金属の分離が容易で、資源回収面からみて、高純度のスクラップができる点である。しかもこの大きさが、六ミリ以下、六ミリから二十五ミリ、二十五ミリ以上の三種類に分解される特長をもつ。さらに、プラスチックが再生可能となることも従来の方法と違っている。第三に、音とゴミという二次公害が防止できる無公害システムであるという点である。

しかし実施に当たっては問題が若干ある。それは、ポンコツ車の適正価格による集荷方法や処理コストの大宗を占める液体窒素の安価供給などの検討で、いかにして採算ベースにのせるかということである。

× × ×

一九七〇年、フランスのエアールキッド社で、液体窒素を利用したパイロットプラント用冷却トンネルが完成し、実験に成功した。

一九七三年、神戸市所在の帝國酸素株式会社を中心に、本処理法の日本におけるパテント実施権会社が設立された。

インチスクラップ法は、物質のもつ低温脆性を利用して、ポンコツ車を無公害で処理し、純度のよい鉄鋼原料のスクラップを得る方法である。

図のフローシートによってその工程の概要を説明すると、①型締め部で、廃車は三方からプレスされ、ほぼ六〇×六〇×八〇センチの大きさに圧縮される。手分解を必要とせずにプレスされる。②冷却トンネル部は延長ほぼ四〇メートル内で液体窒素に浸漬され、トンネル出口にマイナス一五〇度Cで押し出される。③破砕部でハンマー式の破砕機で破断される。プラスチック、ゴミ、ガラス、砂、油は⑤の除塵装置に吸上げ捕集される。つづいて④選別部で大中小の塊に分類され、さらに磁気選別により鉄と非鉄金属に分けられる。

なお、最後にゴミ類は圧縮されアスファルト処理されて埋立てに使用される。